



ふじのくに⇒せかい演劇祭2024に寄せて

「人は変わらない」と考える处世術がいま日本でひろまっています。「他者との関係に期待しない」という处世術ですね。

そのうえ昨今の世界情勢は<異なる価値観を持っていてもそれでも人間はわかりあえる>という希望を人々から奪い、その結果人々はいよいよ、ほかの人との関係に興味を持つよりも自分の持ち物を大事にしてその範囲で楽しもうという傾向を持つようになり、「他者と出会うことで自分は成長する」と考える人は減ってしまったように感じます。

しかし世界をこれ以上悪くしないためには、いま目の前の現実から「人間はこの程度のものだ」と見限ってしまうのではなく、現実を冷静に観察しつつどこかに希望を見いだせるはずだと探し続けることが必要なのではないでしょうか。舞台芸術は、「他者と出会うことで自分は成長する」という（シニカルな人からは「頭の中がお花畑」と言われそうな）理想が、しかしいまなお、本当に起きるのだと実感させてくれるジャンルです。舞台芸術は、いうなれば「地に足の付いた夢」なのです。

今年のせかい演劇祭は、ようやく、コロナ禍前と同じ状況での開催になったと思います。そして日本はライブエンターテインメントの活況が戻りつつあります。そのことは舞台芸術界で働く者として嬉しいことには違いないのですが、最近の活況は、「地に足の付かない夢」を強く前面に押し出す舞台に多くを頼っているように見えます。地に足の付かない夢、とここで表現した作品群は、それを観ることで自分が変化し成長することよりも、もともと自分の好きなものにいっそう肩入れすることを観客が楽しむタイプの舞台のことです。

そういう作品はわれわれに楽しみの時間を与えてくれる大事なものです。とはいえ、世界の現況に絶望している人々を、（その絶望をいつか「忘れさせる」のではなく、）希望の方へと引き戻すような舞台は、現実世界の苦さや複雑さをじゅうぶんに踏まえた上で、それでもなお光を灯すという苦闘によってしか生み出されないでしょう。こうした舞台は、その苦さゆえに、市場経済の原理で流通・消費されるのは困難でしょうが、もしも「観るためには観客の側にも努力が要る、集中力やエネルギーが求められる」作品がなくなってしまうたら、それは、もし江戸時代に能が滅んで歌舞伎だけになっていたらと考えてみるとわかるように、舞台芸術の土台がやせ細りやがては花も乏しくなる結果をもたらすでしょう。

チャーホフや岡倉天心や安部公房が、きわめて苦い世界観をもちながら、その絶望ギリギリのところで希望を探そうとしていた姿、あくまでも他者との関わりの中で希望を発見しようと格闘していた姿を提供できる機会は、こんにちの日本の市場の状況の中からはなかなか作り出せません。

僕が、ふじのくに⇒せかい演劇祭という仕掛けをSPACが担い、持続させてゆかねばならない、と考えるのは以上の理由からです。「観る側にもエネルギーが求められる」作品と出会うことは、この世界への自分のスタンスが変わってゆく契機になり、長く続く喜び、生きることの楽しさにつながります。

そして「フェスティバル」という非日常空間でなら、「観る側もエネルギーを出すこと」をためらわず楽しめるはずだし、そういう時空間をこそ作ってゆかねばならないと改めて強く思っています。

ぜひ初夏の非日常時空間に足をお運びください。

2024年3月15日

宮城 聡